

# 2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 3 月 24 日

所属	基盤教育機構	職名	専任講師	氏名	柘岡大輔
研究課題	新しい人間論のための原理探究—相反する世界が織りなす創造性の諸原理の原理試論—				
研究キーワード	哲学 創造性	当年度計画に対する達成度		3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した	
関連するSDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	16. 平和と公正をすべての人に	該当なし	該当なし	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>新たな社会と人間の生活様式が求められるうえで何を基盤と考えたらよいか。この問題は、人間観や社会観、文化や生活・経済観の問題と社会実装されている諸「設計」の組み合わせの問題である。哲学の分野では、個人の認識と社会的に形成される各種組織・システムネットワークをまたがって論ずることは、いよいよトレンドになっては来るであろうが、まだ主流ではない。</p> <p>そこで今年度は、『ゲーデル・エッシャー・バッハ』の続編と知られる、ホフスタッターの『私は不思議の環』の文献研究を中心とした。そこから以下のような考察がまとまった。</p> <p>あらゆる哲学ないし諸学術のオープンリソース化と、各個人の志向性に対応する AI 化を未来に据えるとき、教育方法論はいくらでもクリエイティブになるが、それらの「起点」「作用点」つまり「パースペクティブ」は徹底的にすべての創造性の根本原理であることに変わりがない。それは「人間論」から「システム論」まで、あらゆる一切の人間の英知的活動とその創造性の土台をなすものである。ホフスタッターは、一切の「変換」可能性をシステム・データサイエンス分野に観ることにある。これは生命活動の本質として、正当な動機と根拠を持つ。だが、問題はその設定基準である。これがすべてのプログラムの倫理規定やその形成原理と重なってくる部分になる。すなわち、「パースペクティブ」がカギなのである。それによって「設計」「設定」「目的」「目標」が変わり、それに応じて「意味」が変わるからだ。これをしかしそれとして、認識論的に単に扱っても、どうも面白みに欠ける。一歩進めて、またかつ、シンプルに、かつ明瞭な「思考の土台」として、あるいは「未来を創造的に生きてゆくためのたたき台」として、遠藤隆吉哲学すなわち「生成主義哲学」がある。</p> <p>遠藤哲学は、蛭名の研究以後まったくと言っていいほど刷新されていない。日本において知られてさえいないし、なんらか顧みられることもなかったようである。そこで、商大の未来を描くうえでも、また、実際に私自身の哲学の関心に応じて、遠藤隆吉の生々主義哲学の解明、刷新と再興、ということが、次年度から始まる研究の基本的方向性となった。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）</p> <p>【著書・論文（査読なし）】</p> <p>2021 年 9 月 『CUC View&amp;Vision』 第 52 号「倫理への学：温故知新と実学の可能性」</p> <p>3. 主な経費 及び 4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）</p> <p>特になし</p>					

(本文は2ページ以内にまとめること)